

信後の真似をするな

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、後生の苦がぬけたか、信樂開發の一念が諦得出来たか、真仮の水際が明らかに付いたか、落ちてよし上がってよしと往生の一段に手が離されたか、露塵程も疑いが無くなったか、現在で即得往生出来たか、はつきりした親に明らかに逢うたか、一切の無明は晴れ亘り一切の志願が満足されたか、聖人様と真の兄弟に成れたか。

よい加減な妥協では薄紙は晴れないぞ。お説教の口真似では疑いは除かれないぞ、御聖教の文字だけ読んだのでは合点は行くけれども、広大難思の慶心は得られないぞ、理屈だけ判ったのでは信樂開發の水際が判らないぞ、人の晴れた世界に調子を合わせているのは真似であって真実ではないぞ。

真宗の道俗よ、他力や唯や其の儘にかぶれていて、真に苦抜けの世界へ出なかつたら
大安心が得られないのだ。百里行く者は九十里を以て半ばとしなければならぬのに、
二三十里行つて既に百里の決勝点に入つた積りでいるから、明らかな解決が付かないの
だ、真剣な求道を抜きにして、無努力を他力の様に心得ているから真の易さが判らない
のだ。疑いの闇を見出し切らないのだから晴れた尊さが味わえないのだ。信仰を文字を
読んだ力で片付けているから不可称不可説不可思議の妙味が判らないのだ。言葉の上で
は信前信後變つた事はないけれども、生花と根のある花との別が有るのだ。何故合点だ
けに止めず真剣に实地に切り込まないのだろうか。教える知識に明かな世界が恵まれて
いなければ、求める人に闇の晴れよう筈がない。理屈の判つたのを信仰と思つてゐるの
だもの、残念だ、残念だ、私一人でも責任負うて叫び届けて上げなければならぬ、
一切の求道者よ、あなたの心を御聖教に合わして喜んでいてはいけないのだ、散乱のあ
なたの心の噴出る儘が六字の宝珠でなければならぬのだ、あなたの言葉の儘が御聖教
に顕れているのに驚く程にならぬのだ。あなた自身が現生不退、正定聚の位に住する

事が出来るのだ。あなたの動かない心が動いて魂一つが即得往生する事が出来るのだ。既に心の中に曇りが有る以上晴れた世界が恵まれなくてどうする。凡夫にははつきりした事がないと教えるが、はつきりとは疑いの晴れた味であつて 晴れなくては聞いた所栓がないではないか。凡夫に晴れたか晴れないか判らないと言つてゐるが、凡夫に判らなくて誰に判るか、曇つたなりでは疑いながらの往生ではないか、晴れたお慈悲を聞き抜けば晴れることは必定である。真劍の求道がないから心眼を開かして戴く域まで進めないのだ。火の中を分けても進む意気がないから開発しないのだ。宿善を寝て待つてゐるから来ないのだ。何故自分の柄を見ない、何故自分の自性に触れない、何故実機の悪性に驚かない、これを見れば何時迄経つても夜は明けなと言つてゐるではないか、判らないのなら明けたのではないではないか、死んで五十二段が超証されるのなら、生きてゐる今現生不退の位に入らなくてどうする、現生不退は正定聚の菩薩ではないか、等正覚ではないか、弥勒に等しい、諸仏如来と肩を並べてゐるのではないか 広大勝解の人ではない

いか 妙好人稀有人最勝人とほめられる身になつても猶ほ機を見るのが恐ろしいか、
手間が掛かると恐れている間は解決が付いた大胆な信仰ではないぞ、手間が掛かると蓋
をしていて何時解決が付くか、親が知つていても今迄自分が知らなかったから 切り墮
とされる迄真剣に成らなかつたのだらう、この動かん機を動かす為に釈尊も八千遍の
御苦勞の有つた事が實地に求めないから判るまい、動かんと投げ捨て置いて動く時があ
るものか、それでも聖人様は「いづれの行も及び難き身なれば」と仰せられてあるでは
ないか、聖人様が仰せられたのであなたが仰せられたのではあるまい、自分が自力計度
の感情と魂の底に蟠る自性と闘わして見て、理屈は判るが判らん心のいる事に驚き實地
出離の縁ある事なしと、望みの綱が切れた時でなければ、自力無効と手は離れないぞ、
御聖教の言葉に合わせたのでは八万の法蔵を知つても後世を知らない人だぞ。
この機は千年たつても動かんから動かん儘をお助けじやと言つてはいるが、動かしたこと
の無いものが何を言つてはいるかい、御聖教に誰様がそんな馬鹿を仰せられたか、動かぬ
機が動かされなければ不思議ではないぞ。

それでも此の機は慶ぶやつでない、慶ぶ奴でない者が慶ばずにいられない迄聞かないから、よい加減の処に腰を据えているのではないか。

それでも「歎異鈔」には「喜ぶべき心をおさへて喜ばさぬは煩惱の所為なり」と仰せられてあるではないか、馬鹿者！ 信後の懺悔を信前に持ち込んで疑心の誤魔化しにする奴がいるか、喜び得ないのを手柄のように思い、聖人様でさえ喜ばないと仰せられたから凡夫にそんな大きな喜びの有られよう筈がないと、未信の人の上塗りに用いているが聖人様がお嘆き遊ばすぞ。

聖人様の信仰は実地に悩みぬいて総ての尽きた時を「いづれの行も及び難き身なれば」と投げ出し、総てを赦されて「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば親鸞一人がためなりけり」と飛び上がり、此の一念の瞬間を「立ちどころに他力摂生の旨趣を受得せり」と、其の境地を「広大難思の慶心を彰す」と仰せられ、信後の懺悔を大悲に摂取されていながらも動く煩惱を見つめて「喜ぶべき心をおさえて喜ばせざるは煩惱の所為なり」と述べられたのであって、このお言葉を盲人が棒を振り回す様に、信前の人の前で用う

れば聖人様まで信前に引き下ろす事に成るではないか、畢竟用うる人の解決が付いていないから信前信後の味が判らないのではないか。一体信前信後は何処で分けるか判つてゐるのかい。同行達の煩悶が何処迄進んでいと言う位の脈が判るのかい。盲人滅法で施薬をすれば薬も毒薬と変わるぞ。

人の魂の羅針となる大導師の自信が抜けてはいないか、真に門信徒の要求に応じ、指導し得る自信が有るか、自覚が有るか。

それでも御文章には「十人は十人ながら百人は百人ながら」と仰せられて有るから皆往生ができるではないか、其の通りお言葉に間違いはないのだ、而し其の御言葉通りに間違ひなくなたか、而し其の前には必ず「一念の信定まらん輩は」と書いて有るが、勝手の良い処だけ切売りしたのでは実地が通れぬぞ、「一念の信」の妙味が判つたかい、此の妙味を諦得しさえすれば真仮の水際も、真宗の角目も判るのだ、ここで衆生が生き親も生き、八万の法蔵も読み破れ、三千世界が揺らぐのだから甘いことでは判らないぞ、難中の難とはこの関所のことだが本当に通過できたか、出来たものなら、明らかな事が

有るとかかないとか、そんな大きな喜びが凡夫に有られるかとか、人を異安心とか間違ひ者とか言える筈がないぞ。

「あら心得易の安心や、ゆき易の浄土や」と蓮如上人が仰せれてあるから、そんなに難しい法ではない。それなら大経下巻の末尾に、僅か四行の間に九字も難の字を用いられ、小経には「一切世間甚難稀有の法」「難信の法」、聖人様は「真実の浄信は億劫にも獲難し」「真実の浄信実に獲ること難し」正信偈にも和讃にも難の字は沢山並べてあるが、蓮師御一人の易いが本当で、真実の経や祖師の難と仰せられたのは嘘か、畢竟真仮の水際を知らないからだ、実地求道した事がなく、文字だけ読んでいるから判らないのだ。耳に聞き眼で読んでいる時は、易いを易いと知っただけだ、実地の求道が難中の難であつて、開発の後（信後）は易いと言う言葉までもいらぬ易さであつたから「あら心得易の安心や」と「あら」と仰せられた事がわからないのか。

仰ぎ願わくば一切の道俗よ！信楽開発の仏智不思議に打ち明かされ、一切の疑網が切り墮とされ 即得往生不退転し、身も心も南無阿弥陀仏に成らなければ夜が明けたので

はないぞ、真仮の水際が判らなければ 疑いの「ひよつと」は決して除かれはしないぞ。信仰の道は程遠いぞ、そんな生やさしい妥協では本当の安心は獲られないぞ、未だ未だ信仰の決勝点に入つてはいないぞ。入つた真似している間も 報謝も出来れば人も導けるけれども、実地問題が抜けているだけである。実地が無ければ画に書いた餅だから 臨終の食べたい時に間に合わない、自分の心が満足する迄 聞き抜かなければならないぞ。

次の様な機は、皆信前に動いている。

- 1、真宗は只と仰せられるから骨を折る事はいらぬ。
- 2、どれだけ煩惱は動いても疑いさえせねば助かると安心しさえすればよい。
- 3、この墮ちる機に掛かり果てて下さつたのだから私は間違うても親が違わさん。
- 4、素直に聞きさえすればよいのに何故人様は判らない判らないと言うのだから。
- 5、こんなに煩惱の起る奴めを此のままながらのお助けとは如何した仕合せ者であるうか。

- 6、お説教を聞く度毎が初花で今死んでも往生に間違いないとは有難う御座います。
- 7、お慈悲のお蔭で忍ばしても戴き施しもさして戴きます。
- 8、御聖教の通りに私は疑いなく助けて戴くことと安心しているから大丈夫。
- 9、「はい」の返事も向うからどうしたお慈悲の親様であらうか。
- 10、これ程有難いお慈悲じゃもの誰が何と言つても動きはせぬ。
- 11、喜ばんこの奴を無理から連れて往生さすとはどうした嬉しい事だろう。
- 12、夜の寝覚めでもお称名の出てくる嬉しさ、之を他力催促の称名と言うのだろう。
- 13、誰にでも言つて聞かしたい、引き入れるのが御恩報謝じゃもの。
- 14、こう迄お慈悲は有難い、法の為には生命を捧げてもなんともない。
- 15、私がこれだけ堪えさして戴くのも御法のお蔭で御座います。
- 16、私は雑行も雑修も自力の心も振り捨てて一心にたのまして戴いているから 安心だ。
- 17、何とか成れと仰せられたら大事じゃが、成れんままとは有難い。
- 18、此の位の事は凡夫だから仕方がない、なおして来いとは仰せられない。

19、しるしのないのがしるしじゃそうな、なんともないから有難い。

20、国に一人か郡に一人かと言うほど難しいものを、私は易く戴かして貰ったのは厚い因縁で御座います

21、仏様のお計らいじゃもの、私が疑うたとて疑い切る様な上等な柄ではありません。

22、知って来いの仰せじゃないもの、知らんまんまのお助けとは有難い。

未だ色々な案じ振りには有るけれども、百里行かねばならないものとすれば 三四十里の処まで行った信仰である、そして骨を折らないで只を只と思ひ、向こうばかり眺めた自信の抜けた空っぽの信仰で苦が抜けた積りで自惚れている。お聖教に調子を合わしては喜んでゐる、この時は信前信後の水際は立たず、何時とはなしに戴いたのだと安心しているが、お聖教には何時とはなしに戴くとは仰せられてはいないぞ、私だけは素直に聞かして戴いてゐると思うのが、僇慢の悪衆生で何処に素直な処が有るかい、未だ未だ疑いの芽が萌さないのではないか、右の桁にいながら他人の真剣な求道を笑っているではないか、十方法界が我が物じゃと苦の抜けた人を見ては、そんな大きな喜びが凡夫に

有あられるものかと自分の機きの抜ぬけた尺度しゃくどで批評ひひょうしている時は、其その儘ままが邪見じゃけん憍慢きょうまん謗法ぼうぼう闡せん提だいの悪魔あくまではないか、悪魔あくまが悪魔あくまだと映うつらないのは機きを見みないで法ぼうの鏡かがみばかり眺ながめてい
るからだぞ。

そんな浮草うきくさの様な信仰しんこうで臨終りんじゆうの関所せきしょが通とれるものか、皆自力みなじり計度けいたくの信しんではないか、大
安心あんしんは何処どこで付ついたか、未まだ未まだ先さきに行いかなければ疑うたがいは出でて来こないぞ。

五十里りから九十里位迄りくらいまでの信仰しんこうの気持きもちは

1、只ただとは仰おほせらるるものの、私わたしの様ように悪わるい心こころが出でて来きてこれこれでよいかしらん。

2、いや、機きを見みる事ことはいらない、仏様ほとけさまがよくよくご承知しょうちの上うえで成就じょうじゆなされたのだか
ら。

3、そうは言うてもひよつと間違まちがうたらいけない、兎うの毛けたいさん大山だいさんと言ういうから。

4、知識ちしきの処ところへ尋たずねて行き、どうも成なれませんかと言いえば、それより他ほかに何なにが有あるかとか
られる。

5、何故なぜ今迄いままでの様ように喜よろこびが続つづかないのだろうか。

- 6、喜ぶ時や報酬の出来た時には参れそうなが、嫌な心が出るとどうも参れそうにない。
- 7、夜の寝覚めにあれ程涙が出て慶べたものが今は砂をかむ様で何ともない。
- 8、何故あの人の様に喜べないのだろうか、自分のがひよつとしたら違うのではなからうか。
- 9、人に不審を尋ねようと思うけれども今更どうだろうかと問われもせず。
- 10、落ちる者をお助けでよいではないかと言われるけれども、気ばさりがやまない。
- 11、一寸も有難うない様な気がするがこれでよいだろうか。
- 12、お慈悲が戴けたのなら今少しは変わりそうなものじゃに、益々腹も立つ。
- 13、聞けば聞くほど薄紙一重が邪魔になって自分ながら後すざりする様な気がする。
- 14、嗚呼今迄は何をくよくよしていたろうか此の儘ではないかと片方離して又握る。
- 15、其の下からそれでよいかと頭を上げる嫌な機が出て来る。
- 16、信仰が薩張り判らなくなつて何を聞いても受け付けてくれない。
- 17、私はこんなに忙しい中を参つて来たのに喩話など聞きに来たのではない。

18、人様にはこんな煩悶は無いのであろうか、思うまいと思えど疑いの曇りが出てくるが。これでよいのであろうか。

19、何故私一人は聞いてくれないのだろうか、唯が唯と判らないのだろうか。

20、訳も理屈も判っていて、はいと返事が出来ないのだから苦しいではないか。

21、ここ迄くれば知識選びをせずにいられない。

22、誰が何と仰つてもこの疑いが晴れるまでは聞き抜かずにはいられない。

23、機を見るから手間が掛かるとでも言おうものなら、機を抜きにした法が有るものか、

あんな知識は未だ抜けてはいないと見下げる。

24、判つていて判らないのが残念じゃと鞭を打つて進む。

其の人其の人で思い振りは違うか知らないけれど、未だ深刻に切り込んだのではない。

判りたいのが腹一ぱいで何か握らねば落ちそうでないから、今度聞けば判ろう、助かろう、はつきりするだろうと法に向かつて突進するのである。行けども行けども五里霧中、この時よい知識がないと、腰を据えて動かなくなる。九十里から九十九里に達す

る間が真に難中の難であつて、言葉にも筆にも頭わされない、実地に求め抜かねばならぬ。

1、こう迄親切にお諭し下さつても私の心は一寸も受け付けてくれません。

2、唯も他力も其の儘も耳までは判つていて何故腹底が「うん」と言わないのだろうか。

3、その機は千年経つても「うん」とは言わないと言われるが、言わなければ満足が出ない。

4、何故私の心は周章てくれないのだろうか、大病に罹つたら聞きはすまいか。

5、順境だから聞かれないのではないか、子供か夫か死んだら驚きはすまいか。

6、早く聞き開かなければ仕事も手に付かないではないか。

7、こうも聞かれないものなら聞き初めねばよかつたに。

8、今更進むにも進まねばやめるにもやめられず今の苦しさを今救うて欲しい。

9、成れん儘とは知りつつも、判らん儘とは聞きつつも、成りたい判りたいが腹一杯。

10、元の信心が楽だから崩したのを元通りにしてくれと知識に不足を言い出す。

11、一心不乱いっしんふらんに求めるもとかと思えば開発かいほつの後の事ことを考かんがえている。

12、未だ脇見わきみしているが、一大事いちだいじではないかと引き戻もどせば平気へいきでいる。

13、その癖人くせひとの足元あしもとがよく判りわか、あんな氣きのきいた事ことを言いっているが、疑うたがいまでは出でていないのではないかと謗そしっている。

14、人が解決かいげつ付けば自分じぶんの無努力むどりよくを棚たなに上あげて知識ちしきと其その人ひとを怨うらむ。

15、何も彼なにも知しっている事ことが邪魔じやまになり、話はなしの先回りさきまわをするから真劍しんけんに成なれない、何なんにも知らなければ早はやく戴いたけようものに。

16、一大事いちだいじじゃと上うえの心こころは周章あわてるが下したの心こころは何なんとも思おもってはいない。

17、もう私は駄目だめじゃ、もうすっぱりやめて此この世よだけなと安氣あんきに暮くららそう。

18、お前はそれまえでよいかと下したの心こころが頭あたまを上あげる、地獄じじくが恐おそろしくてやめ切きりもせず。

19、どうしたらよいかと泣なくにも泣なかれなくなる。

20、誰だれか身体からだを縛しばり上げてでも教おしえてくれればよいと思おもい出だす。

21、寺てらに参まいらずにいられない、参まいっても空むなしく帰かえる、只々ただただうろろしているばかりだ。

22、何なんで苦くるしんでいるのか自分じぶんにも判わからない。

之これだけ進すすむと、なりも振りも、恥はじも外聞がいぶんもない、知識ちしきを選えらんで猛進もうしんせずにはいられない。
百里りの瀬戸際せとぎわの苦痛くつうは一通りひととおではない、一つ間違まちがえば必墮無間ひつだむけんか、聞き得きれば五十二段ごじふにだんかの境目さかいめじゃもの、能所共のうしょどもに真劍勝負しんけんしょうぶじゃ。

1、心こころは次第しだい次第しだいに細ほそるばかり

2、こう迄馬鹿までばかでなかつたが。

3、宿善しゆくぜんが無いなのではあるまいか。

4、知識ちしきの前まえに出でれば落ち付おく、帰かえればあわてる。

5、発狂はつきようするのではあるまいか。

6、地獄じじくと聞いても極楽ごくらくと聞いても何なんともない。

7、周章あわてで周章あわてず急いそいで急いそがず。

8、判わかつて判わからず知しつて知しり得えず。

9、泣ないて泣なかず思おもうて思おもい得えず。

10、驚いて驚かず騒いで騒がず。

11、八千遍の御苦勞も私一人は洩れたか。

12、親様の唯は唯ではない、こんなに苦しいのに。

聖人様は他力真宗を開きながら何処に他力が有るか、と自分の苦しきの余りに毒舌をはいたのだ、今死んだら如何なるか、と藻掻けば藻掻く程、泣けば泣く程、泣かんの「てれっ」としている心が、広さも知れねば深さも知れず、お前が聞いてくれないから墮ちるではないかと切り込んで、平気で未だ死にはせんと言っている、愈々私一人は聞き切らんと望みの綱の切れた時、実地腹の底が「ぐらつと」と総崩れで墮ちた時、「あつー」と今迄動かなんだ「てれっ」とした心が動いた時は、「唯ぞ」の一言で貫かれ、親様！唯とは此の儘でしたか。

2、動かかん心が動いたとは不思議で御座いました。信心歓喜踊躍歡喜せずにはいられるものか。

3、今まで不足を言っていた全部がここで赦され、身も心も南無阿弥陀仏。

4、あら心得易の安心や、行き易の浄土や。

5、墮ちてよし、上がってよし。

6、信じ切らなかつた私が信じられた事を信ぜずにはいられなかつたのだ。

7、疑うて見ようとしても疑う余地が無くなつた。

8、機を見てよし法を見てよし。

9、今迄邪魔に成りよつた煩惱が悉く慶びの縁と成るとは不思議でならない。

10、死んでから往生かと思つていたら今撰取不捨の御利益を蒙つたのであつた。

11、見れば見るほど照らされて報恩の出来ない浅間しさを懺悔せずにはいられない。

右の様に、私の信仰の道に当てて書き連ねて見たが、猶詳細は『入信の道程』に記してある。只々信仰を死後にのみ役立つ様に考えたり、眞の解決まで行かずに理屈の判つたのを安心戴いたように片付けたり、自分の求道のないのを他方の様に思い、他人の眞剣な態度を異安心じゃと冷笑するのは、邪見憍慢の悪衆生であると懺悔し、疑網の断除される迄、信樂開發、眞仮の水際の明かになる迄進まなければならぬ。

百里に到達する迄を信前の機と言ひ、調熟の光明に照らされていると言うので、一切の無明の闇は晴れ、一切の志願が満足された時が到達したので、信樂開發とも信心獲得とも信後とも撰取不捨の光益に預かつたとも言うのだから、動かぬ心が動く迄は求道しなればならない。

最後に一言、真似は真似であつて、真実ではない。

平成三十一年二月 発行

発行所 親鸞聖人と

大沼和上に学ぶ会(一)

〒933-0007 高岡市角字板鳥五四三一二